

春燈

1月号

January 2013



主宰の句

安立公彦



身に入むや死者の温顔灯に浮かび

(悼・一ノ瀬次郎氏)

街住みの干柿小さく吊しけり

行く秋や四方に山なす遠江 (三ヶ日二句)

対岸はたづきの明かり九月尽

下町の顔となりゆく一酉

成瀬櫻桃子の句

飯蛸や川を境の須磨明石

『素心』昭和五十六年

関西大会で来神したおりに足をのばされ、この句を思いつかれたものと思われる。当然、念頭には芭蕉の句「蝸牛角ふりわけよ須磨明石」があつたはずである。

豊臣秀吉の天正検地により、須磨（摂津）と明石（播磨）に小さな川を境に国が分割された。また、この地は源平の戦いのあつた古戦場でもある。一の谷の合戦で討たれた平敦盛を葬つたと言われる塚も近くにある。

乗鞍三彦

成瀬櫻桃子の句

春彼岸亡き子と一と日遊ぶかな

「俳壇」平成十四年

亡き子は言うまでもなく美菜子さんのことですね。四十六年の間、娘を取り巻く御家族のお暮しにもそれなりの暗鬱もあつたであろうことは容易に想像出来ます。しかし、先生の美菜子さんを詠んだ句は、必ずといってよい程愛のオブラートで包まれています。まして掲出の句には何ともいえぬ安堵感がほの見えて救いを与えて呉れます。遊びけりでなく遊ぶかなが佳いですね。

堀内五齡

燈下集



○ 横田初美

秋の薔薇渾身の色極めけり
桐一葉連れ呼ぶ風の出でにけり
朝ごとに交はず茶の花籬かな
冬めくや昼を灯して轆轤ひく
行く秋や馴染みし母の志野茶碗

○ 沼田桂子

十一月しづかに刻む砂時計
こんなところにちひさき骸冬に入る
初時雨かたきころのとけてゆく
ほんたうはさびしい枯葉ちる枯葉
大切なもの攫つてゆきし神渡

○ 秋場貞枝

光陰矢の如し八十路の古曆
秋惜しむ母の泥染袖かな
長き夜や一人余生の意地を張る
人形町に残る昭和の小春かな
信濃路や稲架木の骨の風に立つ

○ 東京の星数へをり台風過

○ 佐渡谷秀一

元町へ急坂走る木の実かな（横浜）
「何時もので」と聞くマスターや居待月
アルコール度なき酒の酔ひ秋薔薇
パスポート切れて久しき衣被

○ 宮田 豊子

山深く集落つつむ紅葉かな

紅葉山身を細めぬる常緑樹

やや寒や妻失ひし鳩の背

今年酒老いし愛車にかけやりぬ

白柿の朱塗の盆に盛られけり

○ 佐々木 新

京四条托鉢僧の赤い羽根

色鳥の風に色点す明日香かな

鮎落ちて青を深むる仁淀川

晒されて忘れ去られて鴟の糞

黄葉して梢あかるき樵の森

○ 呂 秀文

勝負論外されど捨て身の独楽回し

与ふる幸賜る幸や社会鍋

寝待月待つ身の辛さしみじみと

蓮枯るるやがては果つる日もあらん

愚痴こぼす胸に入り込む隙間風

○ 呉 文宗

淵際に熟るる仏手柑手とどかず

星走る道なき蒼穹遮二無二に

破芭蕉廃道迷ふナビゲーター

馬肥ゆる咎めぬ移り箸

その走り火をためらはず門火焚く

○ 陳 妹蓉

檜の香残る廢駅秋惜しむ

檜匂ふ白木のベンチに鹿来る

大蓑虫勝気の性は母ゆづり

ダイエットのふと手を出すや中秋餅

持ち寄りの十八番の酢豚馬肥ゆる

○ 井上 正子

五臓六腑次第に痛む秋暑し

小鳥来る老弟妹と久に逢ふ

お先にと知己の逝きしや秋深し

人形劇自演のホーム文化の日

庭先をすつと駆け抜く馳かな

当月集

安立 公彦選



○ 篠原幸子

霧隠る湖畔ほつほつ灯り初む

雨の譜の池の囲秋を深めけり

彫刻の竜のみじろぎそぞろ寒

菩提子や仏陀の慈顔まなかひに

門前でしぐれ煮買うて秋惜しむ

○ 藤原若菜

子離れの後の夫婦や吊し柿

水の秋碑文を読める声の和し

秋霖やうたかた生るる心字池

老杉を囲む羅漢や石路明り

大花野分け入らば尾の生ゆるやも

○ 小山繁子

行く秋へひと駅毎の汽笛かな

青北風や井伊堂塔の黙かさね

単線車秋思のせゆく湖畔かな

まなざしの羅漢父似や石路明り

秋時雨引佐細江の滯標

○ 川崎真樹子

栗飯の栗数へ合ふ兄妹

木守柿に色をゆだねて夕日落つ

英字新聞に包む銀座の石焼諸

合掌のこの身をさらへ神渡

苦言呈して残る虚しさおでん吹く

○ 神田恵琳

栈橋に靄の浮き立つ神の留守

父の忌を修し枯萩くくりけり

水底の落葉ひかりを集めをり

父しのぶ軍艦めぐり神無月

沼まさに枯の序曲を奏でけり

春燈の句

安立 公彦選

碁盤拭く一人の夜や虫時雨

千葉 堀 光子

我が夫に似たる羅漢と秋惜しむ

十三夜仏足石の吐息かな
晩秋や艦綱軋む船溜り

爽やかや湖の明るき遠江

水澄むや小江戸巡りの乗車券 (川越三句)

禅林の松や色なき風の過ぐ

化粧の間の秘密階段曼殊沙華
紅葉づるや老舗料理の芋づくし

疎まれて嫌はれてなほ泡立草

福島 森谷 達三

つたなさの身の程なるや文化の日

星月夜老いたる犬と家を守る
人の世に残る温みや草紅葉

菊作り損ぜしを己が姿とも

残菊やのこる色香を誇りとし

千葉 金森 涼

鳥渡る行く術もなき老い一人

地虫鳴く八十路の坂の道険し

秋しぐれ薫ばかりを洗ひけり

長野 藤丸 誠旨

暮るるとも野菊は暮れず匂ひたつ

新生姜辛さも温く口奢る

端正に雨したたらす石路の花

赤貝のむき身とろりと冬日さす
しみじみとひとりのおでん芥子利く

神奈川 宮崎 紗枝

鉄瓶のちんとうたへる今朝の冬

棕鳥の群なす一樹二樹その他

香川 妹尾 貞雪

草風つけて母子の笑ひあふ

初冬やバッグの底の舌下錠
はつふゆや掃き寄せしものみな湿り



余言

安立公彦

る。晩秋、刈り取った切り株からみどりの芽が萌え、その芽は茎となりひつじとなる。
この句、その魯田に萌え立つ魯の「天指す生氣」を詠い、豊穰のよろこびを表している。天指す生氣の魯田は、やがて降霜に遭い土と化すが、それは来春の代田として甦る。
この句を見ると、そういうのちの循環に思いが及ぶ。中七の表現が生きている。

得心のゆかねば落葉踏み鳴らす

片桐てい女

平成二十五年に入る。まさに「光陰に閑守なし」の諺の通りだ。作者は明けて九十一歳。しかしお元氣である。毎月の本部句会には上越新幹線を使つて精勤される。作品には些かの弛みもない、古稀を過ぎると、人の生氣年齢は実年齢に係なく、その人に光を与える。

落葉踏むという動作には幾許かの思索の行為が感じられる。それは静的なものである。この句一転して。「得心のゆかねば」の通り、その思索は動的に傾く。「落葉踏み鳴らす」に作者の思いがよく表現されている句だ。

魯田の天指す生氣残しけり

上山 永晃

一面の青田は稔り田となり、やがて稲は刈られて刈田とな

男らは海に出てをり曼珠沙華

佐藤 信子

この句、十月本部句会で特選に頂いた。利根川河口の南部にある銚子外川辺りの漁村風景を思い出す。それは「男らは海に出てをり」そのままの景である。

折から白畏沙華の季節。男達の出払った船溜りを見下ろす路地には人通りもなく、ただ曼珠沙華が無心に咲いている。そういう漁師町の佇まいを見事表現した句だ。

因みに、昭和五十一年十月の勉強会は、銚子大吠埼を舞台に、二泊三日の日程で行われた。

有線放送午後の刈田を流れけり

松橋 利雄

作者は現在体調を悪くして自宅で療養に当たっている。歩行も車椅子の場合が多いと聞く。作者のお住いの辺りは、今も刈田が開けているのだろうか。

夫人にその車椅子を押しして貰いながら、刈田道を行く作者。青空の下どこ迄も続く刈田は、療養中の身に明るい希望を与える。ふと町の有線放送が流れて来る。初め遠くの方から聞こえていたその有線放送は、いま作者の居る刈田を包む。静謐なしかし密度の濃いひとときが、「午後」に良く表現されている。早いご快癒を願うばかりだ。

我に生涯明治節なる文化の日

滝沢 幸助

明治節、なつかしい呼び名だ。戦前戦中を通して、私の郷里では小学校の運動会は全て十一月三日だった。九州の南端とは言え、運動会の終わる頃はさすがに運動着のままではうすら寒かった記憶がある。

十一月三日（嘉永五年九月二十二日）は明治天皇の誕生日、昭和二年三月、この日を明治節と制定されるが、昭和二十三年廃止、以降文化の日となる。歴代天皇の中で明治天皇の在位四十五年は、昭和天皇の六十三年に次ぐ。

作者にとってこの日は、文化の日という散文的な名目でなく、明治天皇の遺徳を偲ぶ明治節でなくてはならないのだ。その思いが上五中七に良く表現されている。

白秋をたたふ渚や遠江

和田 孝村

平成二十四年度の勉強会は浜名湖の湖畔三ヶ日で行われた。浜名湖は周知の通り汽水湖。湖水には海水も混合して

て、浜辺に近い干潟には牡蠣漁が立っている。

静岡県西部のこの辺りは古来「遠江（遠つ淡海）」と呼ばれ、今回この地を訪れて「遠つ淡海」の言葉が自ずと理解された。浜名湖の広さは四月の関西大会の淡海には遥かに及ばない。しかし湖畔に立つと対岸の有り様が故なく身近なものとして感じられ、こころの安らぎを憶えた。

作者はいま晩秋の湖畔を散策している。時は十月の末、まさに「白秋」である。中七の「たたふ」は「湛ふ」の意味だが、同時に「称ふ」ともとれるところに、表現の多重性を感じる。「遠江」をめぐり生かしている句だ。

大屋根を渡る夕鐘秋惜しむ

岩永はるみ

「方広寺」の前書がある。ここは三ヶ日勉強会の中では最も見どころのある景勝の地。本堂は間口十八間奥行十五間、総二階中央部には山岡鉄舟の額が睥睨するかに架かっている。広大な敷地には重要文化財の建物や、歴代天皇の尊牌を奉安している御堂まで数多ある。

奥山の中ほどに立つと、方広寺の屋根群が一望される。日は西に傾き、折から鐘楼で撞く鐘の音が寺域に隈無く鳴り渡る。かすかに読経の声も聞こえて来る。

「大屋根を渡る夕鐘」がこれらの景を眼前に呼び戻す。大景を良く写生している句だ。今回の勉強会では、予想を遙かに上回る句作の成果があった。